「教育」を回路とする国際交流プログラムの研究

―教育・総合科学学術院とロンドン大学教育研究所との交流―

田中　博之・原田　哲男・堀　　誠
三村　隆男・村田久美子・吉田　　文

キーワード：早稲田大学　教育・総合科学学術院　ロンドン大学教育研究所　IOE　学術交流

【要　旨】2012・2013年度に活動した研究部会「「教育」を回路とする国際交流プログラムの研究」の活動についての報告である。

早稲田大学教育・総合科学学術院とロンドン大学教育研究所とは、2011年５月に箇所間交流に関する「覚書」を締結して、今日まで活動を継続的に展開している。2012・2013年度の学生交流は、2011・2012年度の２カ年にわたる双方向的な活動に対する検証を踏まえて企画・実行されたものである。検証においてとりわけ評価が高かったのが、SS/SVともに学校訪問であり、その参観が貴重な体験的資料となっているといえる。日本学生支援機構の奨学金支援がこの種の交流の推進に果たす役割は実に大きく、重要である。これらの活動を踏まえて、2014年４月には正式に協定が締結されており、今後の交流がさらに活発化することが期待される。

１．活動目的

教育・総合科学学術院は国際交流推進の一環として、ロンドン大学教育研究所（IOE）との「教育」をキーワードとした交流を進めている。IOEは1902年に創設され、本学術院教育学部の前身となる高等師範部は1903年に開設されている。その両者に共有される100年を越える教学の歴史、ならびに近年積み重ねられてきた学術交流の基礎に立脚して、2011年５月にはその交流の指針となる「覚書（Memorandum of Understanding）」を締結して活動を深化させている。この箇所間の交流推進にあって、教育総合研究所は学術院内の一組織として交流事業の企画・運営に積極的に携わってきた。本研究部会は、2010・2011年度企画研究部会「国際交流の推進：ロンドン大学教育研究所との交流」の活動を継承し、当該のこれまでの諸活動を跡づけ、かつフィードバックし、その学術交流のありようを多面的に検討して活動を継続的に促進することを目的として組織した。

２．活動経過（活動一般）

2012・2013年度の活動は、2010・2011年度企画研究部会「国際交流の推進：ロンドン大学教育研究所との交流」の２年度にわたる活動を踏まえ、2011年度に実施したJASSO採択〈「教育」を回路とする国際交流プログラム―早稲田大学教育・総合科学学術院とロンドン大学教育研究所との交流〉のSS（Short Stay）/SV（Short Visit）プログラムに対する検証・評価から始めた。

SS/SVの参加者から提出された研修レポートの整理・分析によれば、SS/SVともに学校訪問に対する評価が極めて高い。文化・制度の違いを超えて、それぞれの国の環境の中で行われる学校教育の空間を複数の校種にわたって参観することは、貴重な体験で大きな収穫になったと判断することができる。

2012年度のプログラムもJASSOに申請の上、採択となり、その実施にあっては、前年度のアンケート評価を視野に入れて、SS（受入）プログラムは10月募集、11月選考、12月実施とし、SV（派遣）プログラムは10月募集ガイダンス、11月募集締切・選考、１月参加者顔合わせ、２～４月に派遣・実施するにいたった。

2013年度のJASSOの公募にあっては、募集内容の変更により、SVのみのプログラム単位での企画申請となり、より語学力を要視し、単位化も視野に入れることなどの要件も加わってきた。各プログラムの担当者が中心となって申請書をとりまとめたが、いわゆるSSの受入に関する公募枠は用意されず、また奨学金支給の対象者から留学生が除外されるなど、公的な支援のありようの変化は相互交流を眼目とした企画に大きな影響を与えた。しかも、当初は各プログラムとも不採択となった。翌2014年１月７日になって１プログラムのみが追加採択の通知をもらい、すでに募集中のプログラムの期間変更等を急遽周知する等、慌ただしい展開となり、応募対象者には戸惑いもあったと思われる。とりわけ同様の派遣プログラムながら、落選したプログラムの参加者との間に奨学金の有無の大きな差を生じる結果となった。また、SSに関しては、奨学資金の援助がなかったこともあって、１名の参加にとどまり、変則的な対応を取ることとなったが、双方向的な交流という柱は保持されている。その実施方法等については今後検討が必要であろう。

SS/SVプログラムの他、2012年度にはIOE教員による講演会を３回開催するなど、年度毎の講演会による交流も継続されている。SVプログラムの経験者やその年度の参加予定者を含めて、各回とも多数の来会者があり、英語による質疑応答を含めて大いに有意義な企画となっている。2012年度は、あいにく当方からIOEで講演する機会がなかったが、2013年度にはSVプログラムの実施に合わせて谷山公規教授が特別講義（Introduction to Differential Geometry and Topology of Puzzles　2014年３月４日）を担当した。

３．実施プログラム報告

〔2012年度〕

(1) SSプログラム

＜日本の教育現場を知るプログラム（12月５～10日：10名）＞

実施に当たっては、IOE側での広報を踏まえて、10月募集、11月選考の上、12月にプログラム実施とした。

１）特別講義：学校・教育制度、日本語を紹介する講義を用意し、日本の教育や文化を幅広く知る情報を提供することができた。参加者は教育学を専門にする人々であり、学校見学を控えての日本の学校制度を紹介する講義にはとりわけ関心をもっていた。

２）ラウンドテーブル：事前にエントリーしてもらい、「教育」ならびに「英語」をめぐって研究発表し、活発に意見を交わした。問題の多様性を含め、国際的な学術交流の場が創り出され

た。実施に際してレジュメ集を作成。

３）学校見学：公立小学校・中学校、高等学校を１日ずつ訪問し、授業ならびに施設を参観し、教員・生徒と給食を食べながら交流した。日本の義務教育の現場について直に知ってもらうことができ、教育の現場の比較がなされた。

４）オリエンテーション：図書館、インターネットの利用、早稲田キャンパス内キャンパスツアーを実施し、施設・機関を案内するとともに、施設利用を円滑にするためガイダンスを行った。

５）多くの参加者がプログラムの前後１週間を有効に利用して、日本での知見を広げることができた。フェアウェルパーティには、昨年度SVプログラムに参加した学生も加わって交流の輪が大いに広がった。（堀　誠）

⑵ SVプログラム

＜プログラムA：教育学各領域を研究する大学院生（学士課程学生を含む）に対する日英双方での個別研究指導（２月25～３月１日：９名、２月～３月：６名、２月～４月：１名）＞

2012年度のSVプログラムは、短期プログラム（2013年２月25日～３月１日）への参加者９名、長期２か月（2013年２月～３月）への参加者６名、長期３か月（2013年２月～４月）への参加者１名で、実施された。

短期プログラム参加者に対しては、IOEによって編成されたプログラムにそって進められた。具体的には、IOEによるオリエンテーション（IOEの概要の紹介）、IDの付与と図書館の利用方法の説明、英語教育、比較教育学、教育行政学などに関する参加者用の特別講義が編成された。また、ロンドン近隣の中等学校２校の訪問があり、授業の観察、生徒との懇談、校長へのインタビューなどが行われた。

欧米の大学の授業方法としては、教員と学生の距離が近く、学生からの質問、教員とのディスカッションが多く用いられるが、日本の大学教育においてはそうした形態は少ないため、IOEからの教員の頻繁な問いかけに戸惑う雰囲気もみられた。教授方法の文化の違いを踏まえての参加が求められよう。中等学校の訪問では、日米の違いやその功罪を考える契機としてきわめて大きな意味があった。

長期プログラム参加者は、自らの研究テーマにもとづいて、IOE教員からのアドバイスを受けつつ、資料収集、訪問調査などをすすめた。長期滞在のメリットは、現地でなければ入手できない資料や情報にアクセスできることにあり、その成果は、修士論文、博士論文の執筆に大きく活かされていることはいうまでもない。

参加者は、IOE側の要請もあり、英語能力を測定する外部試験（TOEIC、TOEFL）などによる証明と早稲田大学の教員による会話能力のテストを経ているものの、短期の滞在者のなかには、英語による授業に関しては、ヒアリングは問題なくできても、教員や大学院生の議論に参加していくことには容易ではない者もいる。そのことによる情報の獲得が少なくなることは残念であり、参加者の事前の英語力ブラッシュ・アップが課題である。（吉田　文）

＜プログラムB：英語教育を専攻する大学院生（学士課程生を含む）のLCC（学習・カリキュラム・コミュニケーション）プログラム（２月25日～３月１日：10名）＞

本プログラムは、教育学研究科英語教育専攻の修士課程と博士課程の学生各２名、英語教育

専攻に進学が決定している他専攻の修士課程の学生１名、及び将来大学院進学を希望している教育学部生５名の計10名の参加のもとで実施された。参加者は、IOEのDepartment of Learning, Curriculum and Communication（以後、LCC）が設置している大学院のプログラムの授業の一部（英語教育修士課程のコース）を聴講し、IOEでの授業参加体験をすると同時に、IOEの院生や担当教授との意見交換にも参加した。この他にもプログラムA、Bの双方の参加者のためにIOE、LCCの教授による、５つの特別授業（１．Introduction to UK Education, ２．Comparative Education, ３．Sociolinguistics and Language in Society, ４．Discourse, Society and Culture, ５．History of Education）が実施された。参加者はそれぞれの授業に先立ち、リーディングの課題を事前に読み、５日間という短い滞在の中で、空き時間には図書館等で勉強して授業参加の準備をする等、IOEの大学院生活を、身を以て体験した。

２月27日と28日は早朝より、学校訪問を行った。27日はHenry Fawcett Primary School、28日はParliament Hill Schoolを訪問し、様々な授業を参観すると同時に、校長、副校長から、学校運営、教員研修のシステムなどに関しての説明があり、参加者からは、積極的に質問が出ていた。多文化・多言語のロンドンの学校訪問や授業参観を通して、参加学生は日本の教育事情との比較という点で、大変に興味を示し、多くの刺激を受けたようである。

短期間に、上述のように英国における教育を、理論と実践の双方から体験し、知見を深め、今後の各自の研究の深化に大きな示唆を得たようである。大変密度の濃い、収穫の多い１週間であったといえる。さらに、このプログラムを通して、イギリスの大学に留学することを決めた学生もおり、大学院の交流プログラムの意義を改めて、実感した。大学院レベルの留学は、語学以上のものが求められ、また専門が近い教授や大学院の学生との交流が必要であり、それが研究や将来の大学院留学と結びつくと思われる。IOEとの交流は、大学院の学生の国際理解と学術交流に不可欠なプログラムであり、今後もさらに発展することを強く希望している。　（原田哲男）

＜プログラムC：大学院教職研究科海外教育視察（３月３日～13日：10名）＞

教員養成に求められるグローバル化のニーズに対応するため、早稲田大学大学院教職研究科では、2011年度からIOEとの間で、短期海外教育視察を実施し、毎年10名程度の学生を派遣してきた。第２回目となる2012年度においては、10名のストレートマスター及び現職教員学生が参加し、３月４日～３月８日までの期間に、IOEでの５つの講義やラウンドテーブルに参加したり、近隣の小学校・中等教育学校を訪問したりした。その目的と内容は、次の通りである。

【研修目的】

①英国における最新の教育理論および教育事情について深く理解する

②学校訪問を通して児童生徒主体の問題解決的な学習の指導について理解する

③最新のICT教育を視察し、新しいテクノロジーと学校教育の関連を考察する

④教員や大学院生とのディスカッションを通して、教育的な対話から理解を深める

【研修内容】

①ロンドン大学・IOE（Institute of Education）における最新教育事情の講義と演習

②学校訪問と授業観察（Gladesmore Community School, Christ Church Primary School及びAylward Academy）

専門職大学院としての教職研究科の院生が、イギリスの教育制度や教育課題を学び、それらへの取組を現地の教育研究機関や教育現場における人的交流を通じて直接体験することで、わが国の教育現場とその教育研究の在り方を再考し、省察や新たな発想を生むことを可能にすることができたと考えられる。また、異文化での体験やコミュニケーションを通し思考する経験のメリットは極めて大きく、グローバル人材を育成する教師のグローバル化を促進したと言える。短期間のプログラムであったが、参加した院生たちは毎日のプログラム終了後、全員で集まり当日の学習内容を共有し、生起した課題に対し真摯に議論を重ねた。（三村隆男）

〔2013年度〕

(1) SSプログラム

＜日本の教育現場を知るプログラム＞

2013年度は、JASSOのプログラムの採択はかなわなかったが、自費での参加希望者をIOEを通じて募集した。その結果、IOEの博士課程に在学する大学院生であり、かつ、日本在住、ICUをはじめとしていくつかの日本の大学において英語教育を担当している、Rab Patterson氏が参加を希望された。

氏は、英語教育の専門家であるとともに、教育工学の専門家でもあり、AppleのDistinguished Educatorsにも選ばれており、教育の効果をあげるためにどのようなテクノロジーを利用できるかについて研究をされている。

SSプログラムの一環として、2013年12月に早稲田大学における村田久美子教授、吉田文の大学院のゼミに参加し、日本の教育と教育方法に関して議論を重ねた。吉田のゼミに関しては、教育におけるテクノロジー利用の問題を、手段として効率的な利用を考えるPatterson氏と、教育にテクノロジーを利用する目的を論じる早稲田の大学院生との間のスタンスの違いをもとに活発な議論がなされたことはきわめて有益であった。（吉田　文）

(2) SVプログラム

＜プログラムＡ＞

・教育学各領域を研究する大学院生（学士課程学生を含む）に対する日英双方での個別研究指導〔英語・社会科教育等を含む〕（３月３日～３月10日）

2013年度は、教育学研究科学校教育専攻とそれ以外の英語教育専攻、社会科教育専攻の学生と共同の10名に対して、８日間のプログラムを実施した。プログラムの編成は、IOEに依頼し、教育学、英語教育などの特別講義が実施された。

また、学校訪問に関しては2011年度にSSプログラムで日本に滞在したイギリスの中等学校長に依頼し、訪問先２校を選定していただいた。さらに、早稲田大学教育学研究科の修了生で、現在イギリスで高等学校の教員をされている境匡氏にも依頼し、参加希望者５名による学校訪問を実施した。

特別講義に関しては、講義時間中の質問の重要性を事前に指摘していたこともあり、2012年度よりは多くの質問がなされ、結果として、講義の内容の深化を認めることができた。学生に対しては、コミュニケーションとしての英語の修得を日常的に指摘しておくことが必要であろう。

学校訪問に関しては、貧困地域の小学校が含まれていたこともあり、親に対する福祉と子どもの教育が切り離せない事象である現実に触れることができ、それによって学生は強い印象を得た。プログラム参加者の多くが学校教員をキャリアとして志望しており、通常では体験することのない外国の学校現場の見学は、自身のキャリアを日本の教育の在り方に重ね合わせて考える機会となり有益である。

2013年度より、JASSOの方針変更の結果、長期のプログラムが廃止された。数年にわたる長期の留学による単位取得・学位取得は必要としないが、数か月の滞在による研究の進捗を求める者にとっての絶好の機会が失われたことは残念である。さらに、SVプログラムの対象が日本国籍、または日本在住資格を有する者に限定されたことによって、早稲田大学に留学している学生に対する機会が閉じられたことは残念である。大学において同等の教育を受ける資格をもって留学している学生であり、国籍条項は外されることが望ましい。　（吉田　文）

＜プログラムB：大学院教職研究科海外教育視察Ⅰ（３月８日～16日）＞

教員養成に求められるグローバル化のニーズに対応するため、早稲田大学教職大学院では、2011年度からIOEとの間で、短期海外教育視察を実施し、毎年10名程度の学生を派遣してきた。第３回目となる2013年度においては、９名のストレートマスター及び現職教員学生が参加し、IOEでの５つの講義やラウンドテーブルに参加したり、近隣の小学校・中等教育学校を訪問したりした。その目的と内容は、次の通りである。

【研修目的】

①英国における最新の教育理論および教育事情について深く理解する

②学校訪問を通して児童生徒主体の問題解決的な学習の指導について理解する

③児童生徒のコースワークやエッセイなどの表現作品の特徴とその評価法を理解する

④教員や大学院生とのディスカッションを通して、教育的な対話から理解を深める

【研修内容】

①ロンドン大学・IOE（Institute of Education）における最新教育事情の講義と演習

②Academyへの学校訪問と授業観察（Ravensbourne School及びCharter Academy）

③Teaching Schoolへの学校訪問と授業観察（Chesterton School）

幸い、天候にも恵まれ、研修目的を十分に達成した有意義な海外教育視察ができた。

イギリスは教育制度面で共通点があるだけでなく、常に最新の理論とアイデアで、教育内容や教育方法における教育改革を実践してきた国である。その最新の理論と実践に関わる動向に直に触れることで、教職を目指す学生達は視野を広げることができたし、自己の指導観や指導方法を省察する上で実に多くの学びを得た。

今後の課題としては、訪問する学校をアレンジしたりするための予算化があげられるだろう。

（田中博之）

４．成果

2011年度に実施したSS/SVプログラムを総合的に検証し、2012年度のSS/SVプログラムの策定・実施に漕ぎつけることができた。継続的な学生交流プログラムとしての可能性を探りつつあ

るが、2013年度にはJASSOの公募形式に変更が加わり、派遣者の対象から留学生が除外されるなど、公的な支援のありようの変化は非常に影響が大きい。

この「教育」を回路とする学生交流プログラムの継続は不可欠であろう。本研究部会の活動は、教育・総合科学学術院内の国際交流委員会と協働してIOEとの交流の推進と促進とを支援するという役割を担ってきた。その交流の大きな柱となる学生交流プログラムの企画・運営を支えるという面からすれば、国際交流委員会は広く資金上の問題をも斟酌して学術院教育会と協働する等の措置をも加え、学部生・大学院生を含めたトータルな学術交流をサポートする組織として機能する道も模索されてよい。その際、プログラム自体の単位化、あるいは大学院進学予定者の参加等を含めたシステムの構築をも視野に入れる必要があろう。

この交流プログラムの企画・実施を通して、本研究部会の兼任研究所員・研究協力員はもとより、関係する教員・職員が有意義な経験を蓄積することができたが、双方向的な学術交流のありようを含めて、今後の課題も見えてきている。「教育」を回路とする双方向的な学術交流は、本学術院とIOEとのアカデミックスの確認を通して、教育学、教員養成、言語教育から数学、理科、社会科学などの多方面への展開も予想され、教員・学生間の相互交流はもとより、共同研究、ワークショップなどの企画・開催の可能性も秘めている。

交流協定についても、2011年５月締結の「覚書（MOU）」から本協定（Academic Agreement）締結へステップアップする下地が整ったものと判断され、IOEからも本協定締結への期待が寄せられていたことから、2014年４月１日に正式に協定が締結された。この新しい環境の中で更なる交流活動が展開されることが期待されている。（堀　誠）

〔記録〕

(1) 活動

〔2012年度〕

＜IOE招聘講演会の開催＞

2012年４月18日

・Paul Dowling氏：教育の研究における Social Activity Methodと分析
（Social Activity Method and Analysis in Educational Research）

2012年10月19日

・John O'Regan氏：世界語としての英語：全地球化時代の教育と学習の視点より
（English as a world language: some perspectives on teaching and learning in a globalized age）

2013年１月18日（大学院教職研究科主催）

・Norbert Pachler氏：イギリスとアメリカ合衆国における教員養成改革
（An Exploration of Recent Teacher Education Policy and Research in the UK and the US）

＜学生交流プログラムの実施＞

〔日本学生支援機構（JASSO）「平成24度留学生交流支援制度（Short Stay & Short Visit）」採択プログラム：〈「教育」を回路とする国際交流―早稲田大学教育・総合科学学術院とロンドン

大学教育研究所との交流―〉〕

・Short Stay プログラム（2012年12月10～15日）IOE院生14名来日
日本の教育現場を知るプログラム

・Short Visit プログラム（2013年２月～４月）
教育学部・大学院教育学研究科・大学院教職研究科在学生を派遣（36名）。

Ａ：教育学各領域を研究する大学院生（学士課程学生を含む）に対する日英双方での個別研究指導（２月25～３月１日：９名、２月～３月：６名、２月～４月：１名）

Ｂ：英語教育を専攻する大学院生（学士課程生を含む）のLCC（学習・カリキュラム・コミュニケーション）プログラム（２月25日～３月１日：10名）

Ｃ：初・中等教員のための日英比較教育実践セミナー（３月４日～８日：10名）

〔2013年度〕

＜IOE招聘講演会の開催＞

2013年10月16日

・Lesley Gourlay氏：カリキュラムの国際化―利点と課題―
（Internationalisation of the Curriculum: Advantages and Challenges）

＜学生交流プログラム（Short Stay & Short Visit）の実施＞

・Short Stay プログラム（2013年11月28日）IOE院生１名参加
日本の教育現場を知るプログラム

・Short Visit プログラム（2014年３月）
〔日本学生支援機構（JASSO）「平成25度留学生交流支援制度（Short Visit）」追加採択プログラム：〈「教育」を回路とする国際交流―早稲田大学教育・総合科学学術院とロンドン大学教育研究所との交流―〉〕

Ａ：「教育」を回路とする国際交流：大学院教育学研究科在学生（９名）派遣。
教育学各領域を研究する大学院生（学士課程学生を含む）に対する日英双方での個別研究指導〔英語・社会科教育等を含む〕（３月３日～３月10日）

＊特別講義（３月４日）
谷山公規氏：Introduction to Differential Geometry and Topology of Puzzles

Ｂ：大学院教職研究科海外教育視察Ⅰ：大学院教職研究科在学生（９名）派遣。
（３月８日～16日）

(2) 刊行物

・2012年12月、『Roundtable Proceedings―Institute of Education, University of London and Waseda University Exchange Programme』

・2013年３月、「早稲田大学教育・総合科学学術院とロンドン大学教育研究所との学術交流について」（2010・2011年度研究部会報告）、『早稲田教育評論』第27巻第１号

・2013年３月、「ロンドン大学IOE学術交流講演会：イギリスとアメリカ合衆国における教員養成改革」ノーバート・バチュラー、『早稲田大学大学院教職研究科紀要』第５号

・2013年６月、「研究経過報告」、『早稲田大学教育総合研究所所報』第18号

・2014年６月、「研究完了報告」、『早稲田大学教育総合研究所所報』第20号
・2015年３月、「「教育」を回路とする国際交流プログラムの研究――早稲田大学教育・総合科学学術院とロンドン大学教育研究所と交流――」（2012・2013年度研究部会報告）、『早稲田教育評論』第29巻第１号

(3) 研究発表

2013年２月２日（土）、2012年度教育総合研究所公開研究発表会　16号館107教室
2014年２月１日（土）、2013年度教育総合研究所公開研究発表会　16号館107教室